

粘土遊びの多様な展開～保育園の実践を通して～

日本福祉大学 江村和彦

1. はじめに

毎年、筆者は保育園、幼稚園などで、大学生を引率し子どもたちと一緒に粘土遊びの実践を行っている。そもそものきっかけは、筆者が陶芸制作を専門としていることから保育園でやきものの器づくりを指導してほしいということから始まる。子どもたちが自分で小麦粉からお菓子をつくるので、そのお菓子を入れる器をつくりたいというものだった。とっさに「やきものも粘土の粉からできますよ」と答えたことから、園庭にシートを敷いて粘土の粉から子どもたちとつくることになった。筆者自身の不慣れもあって、粉に水を入れることが楽しかった子どもたちは粘土をつくることよりも、ドロドロになって滑って遊ぶことに夢中になってしまった。園長に「失敗しました」と弁解しようとする「大成功ですね！」と。子どもたち本来の自分たちで遊びを見つける姿を見ることができたからである。この経験をきっかけに「粘土遊びの多様な展開」を実践研究している。今回はそのいくつかの実践を報告する。



2. 粘土遊び・活動の概要

筆者の実践する粘土遊びには、大きく分けてふたつの方法がある。粘土の粉から遊ぶ方法と、粘土の塊から遊ぶ方法である。それぞれ、材料・道具などを説明しつつ、ふたつの実践を紹介する。

（1）粘土の粉から遊ぶ活動



図1 ガイロメ・木節粘土の粉

粘土遊びに使用する粘土の粉は、陶芸用の粘土の「ガイロメ粘土」「木節粘土」の粉末を主に使用する。20 kg 1袋で20名～30名の幼児が遊ぶことができる。

1) 環境設定 園庭にブルーシートを敷く。人数に応じて広さを調節する。

2) 材料・道具 土粘土の粉、水、ヘラ、タライ、ほうき、ちりとり

3) 実践

①土の粉に触れる(図1.2.3.4)

②水を混ぜるー魔法の水だよ！ー (図5)

③さらに水を入れて泥んこになる(図6. 7)

④ヘラでかき集めて終了(図8)

(2) 粘土の塊で遊ぶ活動

1) 環境設定 遊戯室など広い空間に、ブルーシートを敷く。人数によって大きさを調整する。

2) 材料・道具

・土粘土およそ 100 kg～200 kg。粘土の塊を1～2kgの塊に切り分ける(人数分)

・切り糸

・ヘラ

3) 活動

①4、5人のグループに分かれ土粘土の塊を持ち、頭の上から床に落とす。床にたたきつけたり、踏んだりしながら土粘土の感触を、全身で感じる。(図9. 10)

②思い思いに土粘土を楽しむ。(図11. 12. 13.)

③切り糸を渡し、粘土を切る行為を楽しむ(図14)



図2 活動はグループで



図3 粉の感触を楽しむ



図4 指描きあそび



図5 粉に水を入れる



図6 だんごにして遊ぶ

④全体をふたつのグループに分け、どちらが粘土を高く積み上げられるか競争する。シートに広がったねんどを片づけることもねらいのひとつ。(図15)

⑤全ての粘土をひとつにまとめて活動終了

3. 活動から見える姿

(1) 子どもの姿

粉からつくる粘土遊びでは、粘土の粉から泥へ変容する過程を全身で感じる活動になった。また感触だけでなく、水を入れることで土の色も変わることを子どもたちは発見していた。ほとんどの子どもたちが土の変化を楽しんでいたが、中には水を混ぜた泥の感触に抵抗を感じる子どもの見受けられた。その場合も、無理に参加させず保育者らに任せた。この遊びの利点は、どの土の状態でも楽しむことができ、なおかつ同じ空間で遊ぶことができることを確認した。

(2) 学生の学び

この活動に学生の力は欠かせない。学生は、遊ぶ環境の整備、粘土の準備、遊びの中に入る、後片付け、子どもの服の洗濯など、臨機応変に対応するように事前に説明した。(図16)学生たちの主たる役割は子どもたちの遊びの援助であるが、活動の規模、子どもの人数によって準備や後片付けも増えていく。しかし、遊びを通したさまざまな子どもの姿を見ることができた。例えば年齢による遊び方の違いや遊びの中で作りながら出てくる子どもの言葉を発見するなどである。また保育者の子どもへの言葉かけや援助の仕方などを間近にみることができた。そして、学生自身が全身を使って粘土で遊ぶことができ、部屋の中、机の上での粘土遊びというイメージを変える経験から、土粘土というものを深く理解することができた。総じて学生にとってもこの活動から得た経験は得難いものとなった。



図7 泥んこになる



図8 ヘラで泥をかきとる



図9 粘土を床に落とす



図10 足で踏んで遊ぶ

4. 今後の展開、課題

この粘土遊びの活動をするようになって、9年が過ぎた。保育園、幼稚園、障害児通所施設、子育て支援センター、小学校など様々な場所で展開している。粉からつくる遊びは夏季に限定されるが、昨年(2018年)は酷暑と言われるほどの暑さで園庭での遊びが制限されたのでほとんど実施できなかった。その反面、土粘土の塊の遊びは、天候に左右されずに実践できる。活動が室内なので冬季でも実施できる。どちらの遊びも全身を使って遊ぶことができるので、造形という枠を超えた展開ができる可能性を認知してもらえよう続けていきたい。あわせて、現場の保育者、教師、施設職員みずからが粘土に触れて、遊びの面白さを実感してほしいと願っている。この粘土遊びの活動は、準備、片づけなど負担も大きいですが、その分収穫も大きなものとなる。今後とも、各方面と連携して土粘土遊びを継続展開していきたい。



図 16 あとかたづけ



図 11 共同で遊ぶ



図 12 思い思いにつくる



図 13 世界がひろがる



図 14 切り糸で粘土を切る



図 15 高く高く積み上げる